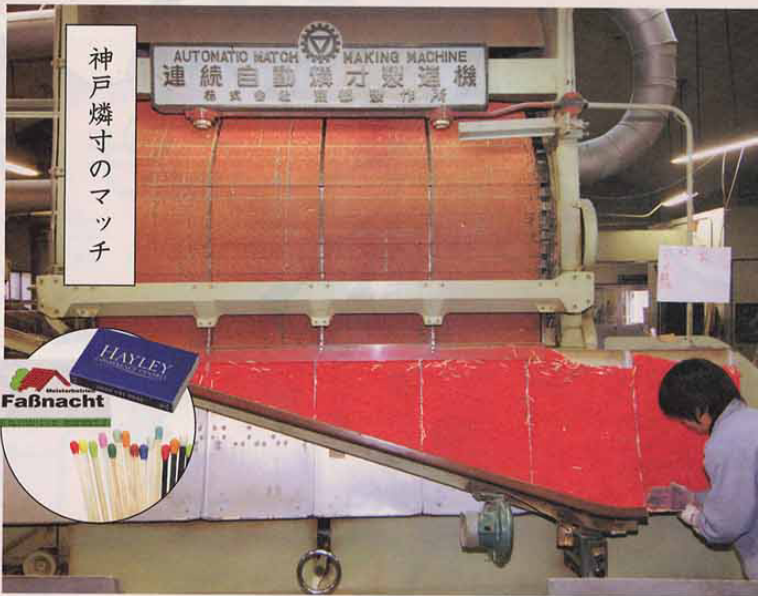




ぬまたげんき

デザイナーやアーティストが作るモノよりも職人によって生み出されるモノをこよなく愛する芸術家。池袋コミュニティ・カレッジ(☎03・5949・5494)にて「美しく年をとる為の“乙女の美学学校”講座」を開講中。

昔はこの喫茶店やバーでもオリジナルの広告マッチが置いてありました。いまでも小さな広告としてがんばっています。日本のマッチ工場は姫路地域に集中しており、世界中で流通している広告マッチの中で多くがここで生産されているそう。



神戸燐寸のマッチ



巨大なベルトコンベアーに無数のマッチが差し込まれた製造機。顔料を混ぜることによってさまざまな色のマッチが作れます。

工	ぬ
場	ま
拝	伯
見	父
記	さん
7	の

ものが生まれるところが見たい!

「しずかに」



巨大な低速ローラーで約50分かけて先端を乾燥させる。



1本ずつ穴にはめて固定し、溶かしたパラフィンと顔料を順番に浸す。



横にされて隙間なく積み上げられ、軸の壁を作る。はみ出た軸は取り除かれる。



軸は既に加工された状態で中国から輸入。パイプで軸を風圧で機械へ送り込む。

① マッチの軸ができるまで

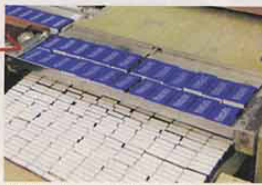


完成したマッチをトレイに積み上げ、壁を作る。トレイごと軸を箱に詰める機械へ移す。



機械で箱に詰められたマッチを検品。「足りなければ補充し、はみ出れば取り除く」

ぬま伯父さんが挑戦!



火がちゃんとつくか確認する“擦りの検品”を経て完成。梱包され、出荷。

今号の工場
本社工場



1929年に創立。創業当時は姫路市にありましたが、その後現在の所在地である県保都太子町に移りました。1万6200㎡と広大な敷地内にはブックマッチやポケットティッシュの製造工場もあります。



今号の工場長
竹田 豊さん

生産部門の常務取締役を務める竹田さんは長年マッチ製造に携わってきたベテラン。マッチのことなら何でも知っている生き字引。最近海外で自分たちが作ったマッチに出合うのが楽しみだとか。

② マッチ箱ができるまで



広告が印刷された外箱用の紙を指定されたサイズで短冊状に断裁。



マッチを擦る“側面”部分を塗る。5~10分乾燥させる。



外側と引き出し部分をそれぞれ作って組み合わせればマッチ箱の完成。

今号の感想文

「お金のない人もいれば、政治的信念なしに一生を暮らしていく人もいます。しかしもっとも不思議なのは、ポケットにマッチを持たない人たちがいることだ。カレル・チャペックの言葉だ。マッチは、あくまで実用的なものではなく純粋に詩的でロマンチックであり、マッチを持たない人はファンタジーが驚くほど欠落しているとも云っている。ぼくは大賛成である。この世の中から忘れられそうなマッチがこんな大がかりに作られていることに大感激である。

ロマンチックで明るい
文明の道具の生まれる場所

工場、社屋共、木造の実に風情ある建物。ここでマッチが、小さな木片から魔法の薬を頭にお化粧され、チャールディングな箱に仲よく収められる迄、オートメーションで作られている。

工場内には「目標一時間8000個」と書かれたスローガンと共に、至る所に「火の用心」「火気厳禁」「マッチ一本火事の元」といった標語が貼られている。

しかるにここは、人類の最大の文明である火をおこすという最も原始的な方法の道具を生み出す貴重な工場である。どんなに時代が変わっても、この世を明るく暖かくしているのはマッチ一本から生まれた火であることを忘れないようにと云っているかの様だ。マッチは元来スウェーデンで発明されたものだが、日本では実用マッチとしてよりも広告マッチの産業として発展した。喫茶店などでタダでもらう広告マッチの世界基準を作ったのは日本のマッチ業界であり、そのサイズのバラエティの多さも世界一なのだ。

一時は百円ライターによってその地位が危ぶまれたが、エコジョーとして見直され、海外からの受注は、いまだ多い。

しかし僕が心配しているのはマッチは今、いったい何に使われているのだろうかということ。タバコだろうか、花火だろうか、たき火か。マッチでしか火がつけられないものがあるれば、マッチは生き残れるかもしれない。きっとどこかで、必ず何かに役に立っていることだろう。希望をこめて。